

## 虹と日本文藝（十二） 続

——上代散文をめぐって（2）——

### 小 序

本稿は、前稿「虹と日本文藝」（十二）——上代散文をめぐって（1）——に続くもので、各国『風土記』をとりあげ、そこに現れた〈虹〉と、そのバリエーションと目される「天蛇」「天橋」「天人（女）」について比較文化的見地を混えつつ、資料ごと個別的に小考を試みたい。

この章では、「虹—天女」型等の表現をしているが、この時の〈虹〉は、「ニジ」にはオス・メスがあるが、そのメスである蛭・霓を含んでいる。対異散同的表記によっている。以後、「天女」との関連の表記はこれによる。

76<sub>1</sub>

荻 野 恭 茂\*

從<sub>レ</sub>此往南十里 板來村 近臨<sub>二</sub>海濱<sub>一</sub> 安置驛家<sub>一</sub> 此謂<sub>二</sub>板來之驛<sub>一</sub> 其西 榎木成<sub>レ</sub>林 飛鳥淨見原天皇之世 遣<sub>二</sub>麻績王之居處<sub>一</sub> 其海 燒<sub>レ</sub>塩藻海松白貝辛螺蛤 多生  
古老曰 斯貴瑞垣宮大八洲所馭天皇之世 爲<sub>二</sub>平<sub>二</sub>東垂之荒賊<sub>一</sub> 遣<sub>二</sub>建借間命<sub>一</sub> 即此那賀國造初祖 引<sub>二</sub>率軍士<sub>一</sub> 行略<sub>二</sub>凶猾<sub>一</sub> 頓<sub>二</sub>宿安婆之島<sub>一</sub> 遙<sub>二</sub>望海東之浦<sub>一</sub> 時烟所<sub>レ</sub>見 交疑<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>人 建借間命 仰<sub>レ</sub>天誓曰 若有<sub>二</sub>天人之烟<sub>一</sub> 者 來覆<sub>二</sub>我上<sub>一</sub> 若有<sub>二</sub>荒賊之烟<sub>一</sub> 者 去靡<sub>二</sub>海中<sub>一</sub> 時烟射<sub>レ</sub>海而流之 爰自知<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>凶賊<sub>一</sub> 卽命<sub>二</sub>從衆<sub>一</sub> 擣食而渡 於是 有<sub>二</sub>國栖名曰<sub>二</sub>夜尺斯夜筑斯<sub>一</sub>二人<sub>一</sub> 自爲<sub>二</sub>首帥<sub>一</sub> 堀<sub>レ</sub>穴造<sub>レ</sub>堡 常所<sub>二</sub>居住<sub>一</sub> 覘<sub>二</sub>伺官軍<sub>一</sub> 伏衛拒抗 建借間命 縱<sub>二</sub>兵駢追賊盡<sub>一</sub> 逮還 閉<sub>レ</sub>堡固禁 俄而 建借間命 大起<sub>二</sub>權議<sub>一</sub> 校<sub>二</sub>閑敢

死之士 伏<sub>レ</sub>隱山阿<sub>一</sub> 造<sub>二</sub>備滅賊之器<sub>一</sub> 嚴飭<sub>二</sub>海落<sub>一</sub> 連<sub>二</sub>舟編<sub>一</sub>  
<sub>レ</sub>杙 飛<sub>二</sub>雲蓋<sub>一</sub> 張<sub>二</sub>虹旌<sub>一</sub> 天之鳥琴 天之鳥笛 隨<sub>二</sub>波逐<sub>一</sub>潮  
 杵嶋唱歌 七日七夜 遊樂歌舞 于<sub>レ</sub>時 賊黨 聞<sub>二</sub>盛音樂<sub>一</sub>  
 舉<sub>二</sub>房男女 悉盡出來 傾<sub>レ</sub>濱歡咲 建借間命 令<sub>二</sub>騎士閉<sub>レ</sub>堡  
 自<sub>レ</sub>後襲撃 盡囚<sub>二</sub>種屬<sub>一</sub> 一時焚滅 此時 痛殺所<sub>レ</sub>言 今 謂<sub>二</sub>  
 伊多久之郷<sub>一</sub> 臨斬所<sub>レ</sub>言 今 謂<sub>二</sub>布都奈之村<sub>一</sub> 安殺所<sub>レ</sub>言  
 今 謂<sub>二</sub>安伐之里<sub>一</sub> 吉殺所<sub>レ</sub>言 今 謂<sub>二</sub>吉前之邑<sub>一</sub>

私註 (一)『常陸國風土記』(二)「行方郡板來村」(三)風土記

(四)養老二年(718)以前(五)藤原宇合(文飾者)・高橋蟲  
 鷹(記事採録者)(六)秋本吉郎校注『風土記』——日本古典  
 文學大系2——(昭33・4、岩波書店)(七)P58・P60(八)  
 (六)の頭注に「和名抄の郷名に坂來(坂は板の誤)と見える。  
 行方郡の南端潮來町潮來(いたこ)が遺称地」とある。——線  
 は稿者による。7・11、1・14の校異は略。

〔考〕「從<sub>レ</sub>此」の「此」はすぐ前に出てくる「香澄里」。かく地  
 名の推移による未知の空間への効果的展開の方法は、中国古代  
 の『山海經』(Ⅱ③)の記述方法に類似している。「天之鳥琴」・  
 「天之鳥笛」の名に象徴される、高天原の天孫系の民族が、土  
 着の異民族——この場合は、東北の、アイヌ、広くエミシ・土  
 蜘蛛等——を策略を弄し、武力を駆使しつつ、ややユーモラス  
 に、また凄惨に征服していく過程における場面に、〈虹〉のイ  
 メージを抱く〈虹旌〉が活躍している。この〈虹旌〉は、中国  
 上古を見ると、その「南方」、湖北・湖南の文化を担っている

といわれる『楚辭』(Ⅱ②)や、南北朝時代に成立した『文選』  
 (Ⅱ⑥)(14)にも現れているもので、〈虹〉すなわち神威の憑依  
 を示す「天子の御旗」である。龍旗や虹旗と同類である。原則  
 として、美しい五色であつたと思われる。(2)私註参照)  
 また、〈天人〉の方は、ここでは仮想的比喩の中に援用され  
 てはいるが、〈虹〉を淵源とする二次的認識による見立て発想  
 によるものである。よって「致富」能力を有する吉祥と観する  
 態度がみえる。

762

茨城里 自<sub>レ</sub>此以北 高丘 名曰<sub>二</sub>晡時臥之山<sub>一</sub> 古老曰 有<sub>二</sub>兄  
 妹二人<sub>一</sub> 兄名努賀毗古 妹名努賀毗昨 時妹在<sub>レ</sub>室 有<sub>レ</sub>人  
 不知<sub>二</sub>姓名<sub>一</sub> 常就求婚 夜來晝去 遂成<sub>二</sub>夫婦<sub>一</sub> 一夕懷妊  
 至<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>產月<sub>一</sub> 終生<sub>二</sub>小蛇<sub>一</sub> 明若<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>言 聞<sub>二</sub>與<sub>レ</sub>母語<sub>一</sub> 於是  
 母伯驚奇 心挾<sub>二</sub>神子<sub>一</sub> 即盛<sub>二</sub>淨杯<sub>一</sub> 設<sub>二</sub>壇安置<sub>一</sub> 一夜之間  
 已滿<sub>二</sub>杯中<sub>一</sub> 更易<sub>二</sub>盆而置之<sub>一</sub> 亦滿<sub>二</sub>盆內<sub>一</sub> 如此三四 不<sub>レ</sub>敢  
<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>器<sub>一</sub> 母告<sub>二</sub>子云<sub>一</sub> 量<sub>二</sub>汝器宇<sub>一</sub> 自知<sub>二</sub>神子<sub>一</sub> 我屬<sub>二</sub>之勢<sub>一</sub> 不  
<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>養長 宜<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>父所<sub>一</sub> 在 不<sub>レ</sub>合<sub>二</sub>在<sub>レ</sub>此者<sub>一</sub> 時子哀泣 拭<sub>二</sub>面  
 答云<sub>一</sub> 謹承<sub>二</sub>母命<sub>一</sub> 無<sub>レ</sub>敢所<sub>レ</sub>辭 然 一身獨去 無<sub>二</sub>人共去<sub>一</sub>  
 望諸<sub>①</sub> 矜副<sub>二</sub>一小子<sub>一</sub> 母云  
 我家所<sub>レ</sub>有 母與<sub>二</sub>伯父<sub>一</sub> 是亦 汝明所<sub>レ</sub>知 當<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>人相可<sub>一</sub>從

爰 子含恨而 事不吐之 臨決別時 不勝怒怨 震殺  
伯父<sup>②</sup> 而昇天 時母驚動 取盆投觸 子不得昇 因留此  
峯 所盛瓮甕 今存片岡之村 其子孫 立社致祭 相續  
不絶 (以下略之)

私註 (一) 『常陸國風土記』 (二) 「那賀郡茨城里」 (三) [76]と  
同 (四) [76]と同 (五) [76]と同 (六) [76]と同 (七) P 78・P 80 (八)  
和名抄の郡名に「那賀」とあり、水戸市西方、赤塚村河和田付  
近に擬せられている。(六)の頭注抄——線は稿者による。  
8~15、1~6の校異は略。

〔考〕 日本古代における「蛇」と「虹」との関係を示す説  
話である。吉野裕子著『蛇——日本の蛇信仰——』(ものと人  
間の文化史32)(昭和56、法政大学出版局)は、この資料のみ  
ならず広く日本古代における「蛇信仰」との関連を考えるこ  
と、すこぶる有益。努賀毗咩の子は、頭注にあるごとく、その  
振る舞いから見て雷神の子のようである。また、人間界では見  
られぬ成長の速さからして、「桃太郎」や「かぐや姫」の説話  
のごとき貴種流離譚の一面をも持つ。

① ②部については、中国古代に、「虹」の化身である「丈夫」  
が水を飲んで娘み、のち丈夫はその生まれた児を伴って去つ  
たが、そのとき風雨晦冥、人は二虹がその家より天に登るの  
を見たという説話が『太平御覧』巻十四にあり、また類似した  
話が「陳濟説話」(≡[12]中)にも見られる。[76]では、「時母驚  
動 取盆投觸 子不得昇」となつて、盆のもつ魔力によつ  
て蛇神の靈性は消され、結果的には昇天出来なかったが、バ

ターンとしては類似している。

「雷」と「虹」と「蛇」とは、ファジーではありつつも、密  
接に結びついているが、前二者は、自然現象として、雷鳴のあ  
と雨を呼び、雨後「虹」がたちやすいことの観察からくるも  
のであろう。さらに、古代觀念の世界では、「虹」は、形状を  
も含めて「天の蛇」類であるという認識が中国のみならず、グ  
ローバルに(比較研究資料ならびに私註、参照)広がっていた。  
すなわち三者は混交され易いのである。

「努賀」毗古・「努賀」毗咩の名も、何となく「ニジ」との関  
連を讀者に想起させる音声をもつ。

東條操の蒐集によれば(『郷土研究』第四卷)、現に、秋田県  
には、「ニジ」を「ヌギ」・「ノギ」と発音する所が残っている  
という。「ヌギーヒメ」↓「ヌガヒメ」、「ノギーヒメ」↓「ノ  
ガヒメ」(「ヌガヒコ」の場合も同)、と発音されても不思議は  
なからう。とすれば、昇天し得ずして、峯に留まり、「其子孫」  
によつて社を立てて祭られた、かの神蛇は、「雷神」と「虹」の  
女神の憑依した人間(≡神の嫁)の子だったのであろう。人  
間の側——「其子孫」≡里人の側——からすれば、祭り続け  
ることによつて、その神威を味方とし続けた。結果的に「相續  
不絶」≡命の継続、と伝統的日本人の幸福の典型を授けられ  
続けることになったのである。そこに、祭らるべきである——  
という神社由来譚としての適切な意味がある。

とまれ、幸福と関係してくるという内容は、「虹」の吐金説  
話または「虹」脚埋宝説話等と、どこか一脈通じていることに  
気づくが、それより底流を同じくしている——と見た方がよさ  
そうである。

〔注一〕山本節著『神話の森』（大修館書店）に「司祭者としての妹の聖資格は兄の娘に受け継がれることにより、祭祀権の系譜が保たれていったものと思われる。晴時臥山にとどまった御子を祭り続けた〈子孫〉とは、おそらくヌカビコの子孫のことであらう。」とある。この子孫は、茨城の里人とも言えよう。

77

益氣里<sup>上中</sup> 所以號宅者 大帶日子命 造御宅於此村 故曰宅村

此里有山 名曰斗形山 以石作斗與乎氣 故曰斗形山

有石橋 傳云 上古之時 此橋至天 八十人衆 上下往來

故曰八十橋

私註 (一)『播磨國風土記』(二)〔印南の郡〕益氣の里 (三)風土記 (四)和銅六年 (七三)頃か。 (五)巨勢朝臣邑治 (国守) 樂波河内 (文人) 等か。 (六)秋本吉郎校注『風土記』——日本古典文學大系2—— (昭和33・4、岩波書店) (七)P 266 (八)「益氣里」は、「加古川の北岸。加古川市東神吉の升田が遺称地。ここから東方にわたる地域。 (六)の頭注抄)——線は稿者による。

〔考〕「八十橋」は「至天」ゆえ、〈虹〉を想定したもの、〈虹〉を言意の奥に秘めたもの、というよりは、上古の伝説として、イメージの世界で、そっくり〈虹〉的存在として信じていたも

のであろう。そしてそれは、神話の混融した民間伝承の世界における〈虹〉の概念を暗示する準記号とも言えよう。〈虹〉の橋型発想の類型に属する。

『風土記』にみえる天の世界との通路の伝承は、神の世界への憧憬が生んだものである。神の世界としての天、という神話的想像であるが、天皇のもとこの現実の世界のなりたちを全体的に根源的に説明しようとする『古事記』『日本書紀』とは別な次元のものである」という神野志論<sup>(注一)</sup>文に留意しておきたい。

〔注一〕『國語と國文學』(平4・8)所収「天浮橋をめぐって」。

78

丹後國風土記曰 丹後國丹波郡 々家西北隅方 有比治里<sup>A</sup> 此里比治山頂有

井 其名云眞奈井 今既成沼 此井天女八人 降來浴<sup>B</sup> 水 于時 有老夫

婦 其名曰和奈佐老夫和奈佐老婦 此老等至此井 而竊取藏天女一人衣

裳<sup>B</sup> 即有衣裳者 皆天飛上 但无衣裳女娘一人留 即身隱水而獨懷愧

居 爰老女謂天女曰 吾無兒 請天女娘 汝爲兒 (天女答曰 妾獨留三人

間 何敢不從 請許衣裳 老夫曰 天女娘 何存欺心<sup>C</sup> 天女云 凡天人

之志 以信爲本 何多疑心 不許衣裳 老夫答曰 多疑无信 率土之

常 故以此心 爲不許耳 遂許) 即相副而往宅 即相住十餘歲 爰天

女 善爲釀酒 飲二杯 吉乃病除之 其一坏之直財 積車送之 于時

其家豐 土形富 故云土形里 此自中間 至于今時 便云比治里 後

老夫婦等 謂天女曰 汝非吾兒 暫借住耳 宜早出去 於是 天女

仰<sub>レ</sub>天哭<sub>レ</sub>慟 俯<sub>レ</sub>地哀吟 即謂<sub>二</sub>老夫等<sub>一</sub>曰 妾非<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>私意<sub>一</sub>來<sub>二</sub>是老夫等所<sub>一</sub>願  
何發<sub>二</sub>獸惡之心<sub>一</sub> 忽存<sub>二</sub>出去之痛<sub>一</sub> 老夫増發<sub>レ</sub>願去 天女流<sub>レ</sub>淚 微退<sub>二</sub>門  
外<sub>一</sub> 謂<sub>二</sub>鄉人<sub>一</sub>曰 久沈<sub>二</sub>人間<sub>一</sub> 不得<sub>レ</sub>還<sub>二</sub>天<sub>一</sub> 復無<sub>レ</sub>親故<sub>一</sub> 不知<sub>レ</sub>由<sub>二</sub>所居<sub>一</sub> 吾  
何々哉々 拭<sub>レ</sub>淚嗟<sub>レ</sub>歎 仰<sub>レ</sub>天哥曰 阿麻能波良 布理佐兼美禮婆 加須美多智  
伊幣治麻士比天 由久幣志良受母 遂退去而 至<sub>二</sub>荒鹽村<sub>一</sub> 即謂<sub>二</sub>村人等<sub>一</sub>云  
思<sub>二</sub>老夫夫婦之意<sub>一</sub> 我心无<sub>レ</sub>異<sub>二</sub>荒鹽者<sub>一</sub> 仍云<sub>二</sub>比治里荒鹽村<sub>一</sub> 亦至<sub>二</sub>丹波里哭  
木村<sub>一</sub> 據<sub>二</sub>槐木<sub>一</sub>而哭 故云<sub>二</sub>哭木村<sub>一</sub> 復至<sub>二</sub>竹野郡船木里奈具村<sub>一</sub> 即謂<sub>二</sub>村人  
等<sub>一</sub>云 此處我心成<sub>二</sub>奈具志久<sub>一</sub> 古事記卷第七 云奈具志久 乃留<sub>二</sub>居此村<sub>一</sub> 斯所謂<sub>二</sub>竹野郡奈具社  
坐 豐宇賀能賣命也

〔古事記裏書・元々集 卷第七〕

私註 (一) 逸文「丹後國風土記」 (二) 「丹波郡比治里」他 (三) 風土記 (四) 『古事記裏書』は未詳。『元元集』は通説北畑親房で延元二年 (333) 頃か。すなわちそれ以前。遡及時不明。 (五) 不明 (六) 秋本吉郎校注『風土記』——日本古典文學大系 2—— (昭 33・4、岩波書店) (七) P 468・469 (八) 「古事記裏書」・「元々集」を校合したもの。1、22の校異略。——線は稿者による。

〔考〕本資料の説話は、広くはいわゆる「羽衣説話」に属するものである。 (厳密には、キーワードとなる飛行具は白鳥処女型の「羽衣」ではなく、飛天型の「衣裳」である所が相違するが。この「衣裳」は「霓裳」であろう。 (霓) は勿論 (雌ニジ) である。後にやや詳述。)

神田秀夫は「羽衣説話」<sup>〔注〕</sup>の中で、幾多の資料を駆使しつつ、羽衣説話は日本の場合その建国以前「三世紀に朝鮮から牛を連れてやってきたと考へられる「天の日矛」の一団が、次の四世

紀に畿内の帝室の統治域の伸長に押されて、近江から但馬へ退去する時、余吾の湖や、丹後の峰山周辺に、話の種をこぼして往つたものと推定される。」とし、また「天の日矛」ではその蓋然性について「貴重な文化を伝えたのに排他的に迫害され」「羽衣を奪われて昇天し得なくなつた天女といふものを、感動をもつて語り出す人間としては、風習を異にする異郷に生活して、故郷への道を絶たれてゐる人間が、最も適切だと言はうとしてゐるのである。」と述べている。

さて、先に『古事記』の「天の日矛」の話の中に、(私説 (虹——天女) 型ではあるが) いわゆる羽衣説話の原初形態が潜入していることを、資料 71 でみてきた。その面で連繫してみても納得がいく。ただし、憧憬しつつ還天すべき「天」の方向は、『古事記』のアカルヒメの場合は、高天原系の子孫の領有する空間、すなわち (日本の) 大和地方をその指向方向としていたのに対し、本資料の場合は、逆に、(日本の) 丹後地方から、(朝鮮の) 天の日矛の故郷方面の空間、すなわち蔚山 (慶尚南道) 地方をその指向方向としている——点が異なる。ただし、本質的には同じであろう。

現在の自身から離れた所を憧れる心は、ローマン主義の心である。すなわちこの説話の奥には、逆境が生んだ素朴なローマンの心を悲しみのうちに湛えているのである。

さて、本資料のルーツはというと、それは古代中国であろう。『太平広記』(12) の「首陽山」説話に、

〔虹〕が下る↓天女と化す↓〔虹〕と化す

というのがある。天女は年十六、七容貌姝美とある。〔虹〕であるから源泉の水を飲み天降るわけであるが、「水を飲み天

降る<sup>(注3)</sup>』というのが原点であろう。であるから時によつては、「溪泉」が「川」になったり「海」になったり「湖」や「池」となるのである。水の存する所のバリエーションである。この資料の「沼」がそれにあたる。「虹」という天の動物が、「天女」として文藝化されれば、「飲水」はそれ相応に「浴水」となろう。本資料を吟味してみるに、——線A中の「沼」は、昔は「真奈井」という「井」であったという。これは、中国の『漢書』(Ⅱ53)中に見られる「虹下属宮井飲井水」や、朝鮮『三国史記』(261—3)中の「白虹飲于宮井」と共通する。とすれば、後に文藝化され、「天女」としたときに「井」では具合がわるく、相応な場面設定として「沼」に推敲したものと考えられる。「浴水」については先述の通りであり、「天女」についても先述のごとく『太平広記』にある。(ただし、「八人」という所はたぶん「多数の」という意であろうが、これは次参考資料・逸文「近江風土記」の話と比考するに、「虹」より「白鳥」の生熊の観察による表現の方がふさわしいように思える。「浴水」も「白鳥」にも共通しているように、まず「虹」の生熊があつて、その上に「白鳥」的なものが塗り染められたと見たいのである。) Bの——線部中、「衣裳」はいわゆる「霓裳」を暗示しているものと思う。「霓裳」の語は、先にも触れたが、中国戦国時代(300 B.C.ころ)、その南方の文化を担っているといわれる『楚辞』(Ⅱ2)に既に見られ、下つては白楽天の詩(Ⅱ16)に頻出し、日本では「霓裳羽衣」の舞として平安時代一時禁止されたこともあつたが、菅公の詩(Ⅱ86)にそれらしき語が見え、『和漢朗詠集』(Ⅱ87)にも見え、「謡曲羽衣」(Ⅱ93)に定着している。特に、(中国式にいえば)淡い五色の「虹」ま

たは、淡色の「副虹」、これらを「蜺または霓」というが、雨上がりの明るい天空に宿り断れ断れとなつて消えてゆく様は天女の衣裳「霓裳」とそれをまとう天女、すなわち飛天の風情にふさわしい。すなわち、それより「天女」を想起するのは、文藝的感性のあるものにとつてはそう至難な創造的飛躍ではなく、また逆に享受者にとつても無理なく共感を呼ぶ隠喩的具象化とも言えよう。Cの——線部は「人間界以外」の存在の本質を示す、「変化」ではあるが高級な天上界の者の「変化」を示す。Dの——線部はいわゆる致富譚ではあるが、これこそ「虹」の特性の一面、すなわち吐金<sup>(注4)</sup>、敷衍されて財宝賦与、至福<sup>(注5)</sup>——という属性である。(これは「虹」が雨を呼び、それによつて農耕生活者には、農作物の命に蘇生・豊饒をもたらし、牧畜生活者には、牧草にまた命を与え、牧草を食む牧畜にその恵みを授ける——それによつて人は安定的に富み且つ幸福になるのである。——という生活に根ざした古代人の祈りにも似た深い民間信仰に支えられているものである。)

DとEの間の貴種流離譚に見られやすい苦悩は、先引の神田説により説明、鑑賞しうる。Eの——線部の記述は、神社の縁起ではあるが、奥に「虹—白鳥」天女への庶民の「あはれ」の表現でもある。「祭る<sup>(注6)</sup>」ことによつて、地上人は地上人的方法によつて優しい天女の魂を還(昇)天させてあげたのである。

以上の吟味によれば、AとEはおおむね「虹」的生熊をその本質として内蔵しているようである。

また、古代朝鮮半島は、「東夷伝」によればその三国時代初期、すなわち三世紀頃には既に魏・晋など中国との文化交流が

あり、中国流の〈虹〉文化も享受していたのである。(Ⅱ26)参照) されば天の日矛の一団もその文化圏に属するものと考えてさし支えなからう。

とすれば、神田秀夫のいう「これも一種の白鳥処女説話の変形とみられること、すでに公認、周知の所である」の言には、にわかに加担し難い。成立のプロセスに関して相違する見解を持つものである。〈虹〉(Ⅱ雌雄のある場合はその総称。蛭・霓を含む・対異散同的ニジ)―天女型、すなわち古代中国的〈虹〉がその発想のルーツ、影響の淵源であろうと考えるのである。これを母胎として、その上に一部分「白鳥処女型」(Swan maiden type) が混入・混融したものであらう。

(注1)『日本神話』——日本文学研究資料叢書——(昭45、有精堂 P. 279。

(注2) (注1) 同書の P. 224。

(注3) 殷代 (Ⅱ1300 B.C. ころ) の甲骨文字に見える。資料1私注参照。

(注4) 資料89101112参照。

(注5) 資料36参照。

(注6)『古事記』のアカルヒメ(Ⅱ71)、『常陸国風土記』の(雷神と)ヌガヒメの子(Ⅱ76)などとも共通。

(注7) (注1) と同書の P. 224。

(注8) 資料1221でみてきた圧倒的とも言えるほどの古代中国における〈虹〉文化に接するとそう思わざるを得ない。くり返すならば、「白鳥処女説話」が中国というプリズムを経て屈折したのではないのである。

782

丹後國風土記曰 與謝郡 郡家東北隅方 有速石里 此里之海 有長大前  
長一千二百廿九丈 廣或所九丈 以下 或所十丈以上升丈以下 先名天橋立 後名久志濱 然云者 國生大神伊射奈  
藝命 天爲通行 而橋作立 故云天橋立 神御齋坐間仆伏 仍佐久志備  
坐 故云久志備濱 此中間云久志 自此東海 云與謝海 西海云阿  
蘇海 是二面海 雜魚貝等住 但蛤乏少 (釋日本紀卷五)

私註(一)逸文「丹後國風土記」(二)「與謝郡：速石里：」(三)風土記(四)慶長十九年写(内閣『釈日本紀』(五)卜部懷賢(兼方)〔六〕781と同〔七〕P. 470〔八〕「與謝郡」は「京都府与謝郡及び宮津市の地。」〔六〕の頭注〔八〕「風土記 逸文」中。線は稿者による。

〔考〕「天の橋(椅)立」については、折口信夫に論述がある。それによると、橋立は形容詞倒置格で「これを正語序になほすとたて橋であつて、これを橋だてと言つてゐるのは、我々からすれば、古い語序の語である。」とし、更に「意味はたてのはしごの事だ。垂直に直立してゐるはしごの事で、沖繩には、近年まで、その古風なはしごが残つていた。一本の太い木の柱をとり、鉈でゑぐつて足がゝりをつけたもので、何處へでもたてかけて用ゐる。おそろくさう言ふものが、進歩した時代のはしだてであらう。」とある。

「天の橋(椅)立」は、〈虹〉を頭に描きつつ見たたて、天界への架橋手段の文藝的表現であり、「八十橋」(Ⅱ77)と同類のものであらう。『記』『紀』の「天浮橋」と次元を異にすること

については、<sup>[72]</sup>(注1)と同趣。

また、「神御寢坐間伏」などという創意の裏には、神田秀夫のいうような、迫害されつつ帰郷したくても帰郷しえない文化的帰化人の悲哀の中の戯れがあつたのかも知れぬ。もう少しゆるく考えれば、それが先にあつた説話の上に重なっているのかも知れぬ。

(注1)『折口信夫全集』第十九卷(昭48、中央公論社)のP399・400。  
(注2)『国語国文』(昭35・2)

79

古老傳曰 近江國伊香郡 與胡郷 伊香小江 在郷南也 天之八女 俱爲白鳥 自天而降 浴於江之南津 于時 伊香刀美 在於西山 遙見白鳥 其形奇異 因疑若神人乎 往見之 實是神人也 於是 伊香刀美 即生「感受」不得還去 竊遣白犬 盜取天羽衣 得隱弟衣 天女乃知其兄七人 飛昇天上 其弟一人 不得飛去 天路永塞 即爲地民 天女浴浦 今謂神浦是也 伊香刀美 與天女弟女 共爲室家 居於此處 遂生男女 男一女二 兄名意美志留 弟名那志登美 女伊是理比咩 次名奈是理比賣 此伊香連等之先祖是也 後 母即搜取天羽衣 着而昇天 伊香刀美 獨守空床 吟詠不絶

(帝皇編年記)

私註(一) 逸文「近江國風土記」(二)「伊香小江」(三)風土記(四)『帝皇編年記』は鎌倉時代末編、よってそれ以前。遡及時未詳(五)不明(六)<sup>[78]</sup>と同(七) P458・459  
(考) この資料は、山本節がその著『神話の森』(大修館書

店)で述べているように「世界的に広い分布圏をもつ『白鳥処女型』(Swan maiden type)に異類婚姻譚たる日本の『天人女房譚』中の離別型」が混融したものである。そして、「白鳥処女型」については「この話型の淵源は遙か昔に遡るらしく、アラビアの『アラビアン・ナイト』・インドの『カターサリット・サーガラ』・北欧の『エッダ』の中などに記録され、口承資料としても、ヨーロッパ・アジア・アフリカ・オセアニア・北米インディアン等々に広く分布している。チャイコフスキーのバレエ曲『白鳥の湖』もこの伝承をもとに作られたものである。」としている。「白鳥」は他界の魂の憑依した存在であるという信仰と、「渡り鳥」としての不思議な生態の観察とがミックスされた所に発想された象徴的表現ではなからうか。日本でも伝播説と同時に、並行発生説も有り得よう。

前資料<sup>[78]</sup>とは初めから天降るべき「飛行手段」が「為白鳥」と異なり、その「飛行手段」については「天羽衣」である所が相違している。「伊香小江」は「水」に関するという意味で<sup>[78]</sup>の「沼」と共通する。「天之八女」は<sup>[78]</sup>と語句は同じだが、白鳥の生態とそのイメージにふさわしい。「即爲地民」は伊香刀美と結婚したことを指すようであるから、その意味では「陰陽の交接」があり、「虹」の本性とも共通する。ただし白鳥説話でも有りうる。思うに、<sup>[78]</sup>との決定的な相違は、「吐金—財宝—至福」観念の希薄である。

ゆえに、この話は、おおむね「白鳥処女」型が濃厚であるが、異界とくに天界との交流(飛来—帰界)というモチーフは、「天の羽衣」(霓裳)と一体化した(ニジ—天女)型のものである。後出資料『竹取物語』(Ⅱ<sup>[82]</sup>)や『謡曲羽衣』(Ⅱ<sup>[93]</sup>)考察

の際の先行資料としては意味が重い。

(注1) 山本節著『神話の森』によると、一般に、

①乙女らが天から白鳥の姿で飛来し、衣を脱いで水辺で水浴する。

②男が旅の途中、彼女らを見つけ、岸辺の羽の衣を一つ盗み出し、その持ち主に結婚を迫り、妻とする。

③乙女は男の留守中、羽の衣を盗み、身につけて天に帰る。

(注2) ①天女が空から飛来し、羽衣を脱いで沐浴する。

②人間の男が羽衣を奪って隠し、天女に結婚を迫り、妻にする。

③二人の間に子が生まれる。

天女は子供(または子守歌など)から羽衣のありか(稲束・大黒柱・天井など)を知らされ、これを盗見して昇天する。

さらにこれらの中に「離別型」・「天上訪問型」・「七夕結合型」があるという。

※〈虹Ⅱ天女〉型は(注1)(注2)中の②については、かなりのスパンがある。すなわち男女の問題Ⅱ陰陽の交接の問題は、一般的には同様であるが、問題となるだけであつてもよし、必ずしもなければならないというわけではない。《虹

(霓)裳》・《致富》に特色がしるのである。

(注3)「白鳥」は、『広辞苑』によると「雁鴨(がんおう…)目が

がんおう科の大形の水鳥。前身純白色で姿態優美。シベリヤ

東部で繁殖し、冬季南方に渡来するが、日本では北海道・青森

県以外極めて稀。ハクチョウとオオハクチョウの二種があるが

類似している。和名ハクチョウ。別称、くぐい、こう、しらとり、白鳳。鵠。スワン。」とある。本資料が「白鳥型」とすれば、北方系の移入または日本列島の地球的に見て極寒期のも

と言えよう。(※「極寒期」については、西岡秀雄著『寒暖の歴史——気候七〇〇年周期説——』(1958、好学社)参考) 追、

平成三年三月九日のNHKニュースでは「今年はシベリヤよりの白鳥の飛来が多く、北海道、青森の池、宮城県にも多かった」という。

また、『折口信夫全集』第十五巻所収、「石に出で入るもの」の中に「此に就て考へられるのは、魂を運んで歩くものであります。それは世界的に多く白鳥です。白鳥即日本でも鵠で、魂の鳥の本体に考へられて居ます。」とある。

12…は、『椋山女学園大学研究論集』連載中の資料の通し番号である。

\* 文化情報学部 文化情報学科